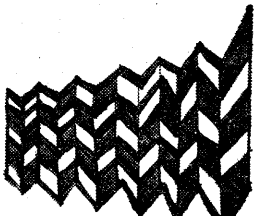
「捨てる」と「捨てない」

守永　英子



春休みにはいって、二、三日家を空けた。僅かの間の留守であったのに、帰ってみると、出掛けるときあれほどきれいに咲いていたテーブルの上の花が、見る影もなく色あせて、散っている。〝捨てなければ……〟と思いながらふと見ると、命尽きた花々の中に、黄色のフリージアだけが、先の方にほんの僅か小さなつぼみを生き生きと残している。無造作に捨てることもならず、命あるものを捨てることへの小さな迷いの時を少し置いてから、多少のこだわりを残したまま、やはり捨てることにした。

花に限らず、私は物を捨てることが不得手である。明治生まれの父親に、物を大切にすることを美徳として育てられたためか、あるいは、戦争中の物のない時代に育ったせいかとも思ってみるが、同世代の人が必ずしもそうでないところをみると、私の性分ということらしい。

保育室を飾るために、子どもたちがときどき持ってきてくれる花も、しおれたところを取り除いては、できるだけ長くいけておく。手間をかける割には、もう美しくないことを承知しながら、潔く捨てられないのである。

このような私の傾向に、先日のH（私のクラスの四歳男児）の言葉は、更に拍車をかけた。私がRの持ってきてくれた黄水仙を花びんにいけるのを見ながら、Hは、つぶやくような、詰るような感じで言ったのである。「ぼくも、先生にお花あげたのになァ……」

私も、Hから何度かお花をもらったことを覚えていたが、花というものが、数日で枯れて捨てられるものであることを、当然のこととしてお互に了承していると思い込んでいたのである。思いがけないHの言葉に、私は、

とまどい、とてもすまない気持になって、「そうね。H君からお花いただいたのにネ。お花って枯れちゃうのよネ……」私には、〃捨てた〃という言葉を口に出来なかった。Hのくれた心まで捨ててしまったように、Hが感じることを恐れたからである。これからも、くれることがあるであろうHのお花を、どう扱ったらよいものであろうか、枯れたことを一緒に確かめて、納得した上で始末すればよいのであろうか、私にとって頭の痛い宿題である。

年度が変ると、毎年子どもたちは、別の保育室に移る。そのために、今までに作って園に置いておいたものを、皆家に持ち帰り、不用の物を捨てる。それぞれの子どもなりに、要るものと要らないものとを分けるが、Aが〃もう要らない〃と捨てたものを、〃格好いい！ちょうだい〃とBが欲しがることもある。引き出しに入れた小さな画用紙の切れ端まで、持って帰る子どももあれば、惜し気もなく、ほとんどのものを、さっさと捨ててしまう子どももある。

ダンボールの箱で作った三台の乗物は、しばらく遊びにも使われずに、部屋の隅に積んであったただけなので、子どもたちに計って捨てるつもりでいたところ、年長組の部屋に引っ越しできないのなら、家に持って帰りたいと言う。大きな箱を抱えて、バスに乗って帰る大変さを考えて、これも、年長組の部屋に持っていくことにした。やはり私は、〃捨てられない〃人間のようである。

考えてみれば、この〃捨てる〃〃捨てない〃〃何を捨てるか〃〃何を捨てないか〃ということは、人間の生き方の基本的なところと絡んでいるような気がする。ちなみに、現在の私が独り暮しを続けていることも、父親に可愛がられて育った末っ子の気楽さを、捨てられなかった結果であるようにも思われる。数年前、本誌に連載した〃保育の中の、小さなこと大切なこと〃も、毎日の保育の中での体感を〃捨てなかった〃ことから生まれたものである。とすると、一見、未練気に聞こえる、この〃捨てない〃〃捨てられない〃ということの中に、〃捨てられない〃よさがあるのではないか……

やはり、私は、〃捨てられない〃人間であることを再確認しつつ、一生に一度くらいは思い切り潔く〃捨ててみたい〃と思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）